

巻頭感 情報の時代、時代の情報

図書館長 北川 勝彦

私たちは、「情報の時代」に生きている。日常で手にする商品の情報は、一見ただけではよく分からない二次元バーコードに刻み込まれている。天気予報の降水確率や気温からはじまって経済動向を示す株価や消費者物価指数にいたるまで統計や数字は日常会話の一部になっている。

コンピュータによって多種多様な情報は、ヴィジュアルに表示されるようになった。そのためにグラフィックに表示できない情報は重要ではないかのように思われがちである。グローバル・サテライト・ポジショニング（GPS）装置は、船舶やミサイルを誘導するだけでなく、最新モデル車のドライバーも誘導する。

百科辞典や辞書はいまでも健在であるが、電子化され、オンライン化されている。データベースは毎日アップデートされ、年毎の補充や数年に一回の改定新版の発行は日常の作業にかわった。ブラウザーやサーチ・エンジンは、ウェブ上で必要な情報を苦もなく見つけ出して取り出してくる。

「情報の時代」はもっとも新しい機器が創りだし、つい昨日生まれたかのような印象がある。私たちの生きている時代は、人類史上の最初の「情報の時代」ではない。人類は常に情報を必要とし、それを利用してきたからである。とは言え、情報を処理する技術や方法が劇的に変化した時があった。私たちはそうした一つの時代に生きているのであるが、それは決して最初のものではない。話し言葉の出現はひとつの弾みをもたらした出来事であったにちがいない。数字や幾何学文様も含めて文字の発明のもたらした大きな変化は、よく知られている。日時計や水時計、機械時計や印刷機も情報の技術の大きな変化であった。

今日、私たちが経験している「情報の時代」は、3世紀ほど前から始まった文化の変化の結果である。文化の変化は、それぞれの時代の人口、経済および社会の変化と密接に結びついており、変化する「時代の情報」についての関心の高まりのなかに現れている。政治家からはじまり一般の市民にいたるまで人々はより多くの「時代の情報」を必要としていただけでなく、もっとはやく簡単に「時代の情報」にアクセスしたいと望むようになった。そのような希望に応える意味でも情報のシステム化が必要であったし、それは今日の「情報の時代」の基礎をなすものであった。

歴史家の仕事は、現在に照らして過去を解釈し、過去に照らして現在を解釈することである。「情報の時代」に生きている私たちに今求められているのは、どのようにしてここにいたったのかを理解するとともに、何が「時代の情報」として求められているのかをよく考えてみることでないだろうか。

（きたがわ かつひこ 経済学部教授）